

非鉄金属概況

日本鉱業協会 企画調査部

金

【海外】

1. 価格推移

6 月相場	高値	安値
ロンドン相場(\$/toz)	1,293.50 (6 日)	1,240.85 (26 日)
国内建値(円/g)	4,578(5、7 日)	4,487(15、21 日)
為替相場(円/\$、TTS)	110.53 (7 日)	113.35 (29 日)

6 月の海外金相場は 1 日に\$1,266.15/toz(トロイオンス)でスタート、月初めはドル安からほぼ一本調子で上昇、週明けの 5 日には 5 月の米雇用統計がらみのドル安から\$1,280 水準へ大幅上昇、さらに 7 日には、英国で総選挙、米国でコミー前米連邦捜査局(FBI)長官の議会証言を控えて\$1,292.70 まで高騰、前年 11 月以来 7 か月ぶりの高値をつけた。これにはサウジアラビア等とカタールの国交断絶による地政学リスクの高まりも価格上昇の支えとなった。

ところが、その後、金の割高感が強まったことや英総選挙など重要イベントが無難に終わったことで続落し、さらには 13~14 日に開催された米連邦公開市場委員会(FOMC)で追加利上げが決まったことで下げが拍車、16 日には月初水準よりも低い\$1,255.40 まで下落した。週明けの 19 日以降も、この流れは変わらず、21 日にかけては\$1,240 際まで下げた。月末にかけても、原油安から軟調に推移し、26 日には\$1,240.85 まで下げ、約 1 か月半ぶりの安値をつけた。その後はやや反発するも、ドル高やユーロ高から抑えられ、30 日には\$1,242.25 をつけて越月した。

2. 為替相場推移

6 月の為替相場は 1 日に\$1=111.97 円(TTS 相場、以下同じ)でスタート、2 日に円安に振れるも、週明けの 5 日以降は概ね円高・ドル安基調を保った。2 日発表の米雇用指標の改善を受けて円売り・ドル買いが先行したが、米連邦準備理事会(FRB)による利上げのペース鈍化がここに来て市場で意識され、それが日米の金利差縮小を見込んだ円買い・ドル売りへとつながったことが円高・ドル安状況を導いた。7 日には、米国政治への不透明感も加わり、\$1=110.53 円まで円が上昇し、約 2 か月ぶりの円高・ドル安水準となった。しかし、それ以降は、7 日のコミー前米連邦捜査局(FBI)長官の議会証言が波乱なく終わり、投資家が運用リスクをとりやすくなるとの見方が広

がったことで、再び\$1=111 円水準へ戻した。

中旬は、英総選挙など重要イベントが無難に終了したことで、\$1=111 円水準での小動きが続いた。15日には5月の米消費者物価指数(CPI)や米小売売上高が市場予想を下回ったため円が小反発するも、FRBが週末に米連邦公開市場委員会(FOMC)で3か月ぶりに利上げを決めたことから、16日には円が\$1=112 円水準まで下落、週明けの19日以降も、日米株価の上昇を背景に同水準の円安・ドル高基調を維持した。月末も流れは変わらず、29日には米10年債利回りの上昇や欧州株式相場の上昇を受け、\$1=113.35 円まで円が下落、約1か月半ぶりの円安・ドル高水準をつけ、翌30日もほぼ同水準の\$1=113.00 円となって越月した。

対ユーロでは、上・中旬と対ドルと同じく円高で推移したが、下旬は欧州中央銀行(ECB)のドラギ総裁が27日にユーロ圏の景気や物価に対して前向きな見方を示したことを受け、ユーロ買いが広がり、円は下落、30日は€1=129.47 円をつけ1年ぶりの円安・ユーロ高となって越月した。

【国内】

1. 建値推移

6月の国内金山元建値は1日に4,550 円/g(グラム)と前月初めと同水準でスタート、上旬は海外相場が堅調推移したこともあり、小じっかりした展開となった。5日と7日には4,578 円と3か月ぶりの高値をつけた。しかし、中旬以降は海外相場の下落から4,500 円水準を挟んだ展開となった。15日と21日には4,487 円まで下げ、2か月ぶりの安値を示したが、月末にかけてはやや反発して、30日は4,507 円となり越月した。

2. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2017年5月分=平成29年5月分)

生産	: 9,578 kg	(前月比 18.8%増、前年比 2.3%減)
出荷	: 9,725 kg	(前月比 28.9%増、前年比 0.5%増)
在庫	: 6,431 kg	(前月比 2.2%減、前年比 28.3%増)

(生産、出荷、在庫の出典は経産省生産動態統計調査)

5月の生産は前月比増だが、前年同月比は4か月連続の減。出荷は大型連休があったにもかかわらず、前月比大幅増、前年同月比でも増と堅調。4月の大幅減の反動と考えられる。在庫は前月比微減だが、前年同月比は2か月連続で大幅増。

銅

【海外】

2017年6月のLME銅相場は月初から月中にかけて\$5,600/t圏を推移したが、その後強気に転じ、月末には3月以来となる\$5,900水準へと急伸した。

米国経済をめぐるのは、5月の失業率が4.3%と2001年5月以来の低水準となり、経済も持続的に成長しているとして、米連邦準備制度理事会(FRB)は14日、フェデラルファンド(FF)金利を0.25ポイント引き上げた。一方、第1四半期GDP確報値は前期比1.4%/年増と改定値から上方修正されたが、伸び率は2016年第2四半期以来の低水準にとどまった。

中国経済は5月の財新製造業景気指数(PMI)が11か月ぶりに50を下回り、1~5月の固定資産投資の前年比伸び率が2000年以来の二桁台割れとなった。しかし、5月の住宅価格は上昇し需要が引き続き旺盛なことが示され、6月の財新PMIは3か月ぶりの水準に反発した。

月末にかけての銅相場急伸の背景としては、LME在庫の減少、原油相場の回復、ドル安に加えて、上値抵抗線を突破というテクニカル要因があげられる。

LME在庫は中国向け出荷で4月以来の300千t割れとなり、29日には250千tまで減少した。しかし、翌30日には相場急伸がはやされ28千t増加した。

NYMEX原油先物は石油輸出国機構(OPEC)主導の減産に懐疑的な見方が広まる中、20日には\$42.75/bblと2016年11月14日以来の安値を付けたが、その後は米国のガソリン在庫減少やシェールオイル掘削の稼働数の減少がはやされ、30日にかけて\$46.08へと7日連続で上昇し、年初来最長の連続高となった。

ドルはドラギ欧州中央銀行(ECB)総裁が量的緩和縮小の可能性を示唆し、利上げを進めるFRBにその他の中央銀行が追随しはじめているとの見方から、対ユーロで前年5月以来となる\$1.14台まで軟化した。

供給障害要因としては、フリーポートインドネシアのグラスベルグ銅鉱山(インドネシア)のストライキが長期化している。同鉱山では2月以降32千名の労働者の約10%がレイオフされたことに抗議して、最大6千名の労働者が5月1日からストを開始した。当初は1か月の予定であったが、会社側がさらに4千名をレイオフしたことから、労組はストを7月31日まで延長し、交渉が解決しなければ3度目の延長の可能性もあることを確認した。会社側はレイオフによる欠員を契約労働者で補充している。

チリ北部が6月6日から豪雨や吹雪に見舞われ、一部の銅鉱山が操業を停止したが、8日までに正常操業を再開した。コデルコはチュキカマタ、ミニストロアレス、ラドミロミッチ鉱山の採掘を停止し、ガブリエラミストラル鉱山では安全実施要綱を発動した。アントファガスタミネラルズはアンツコヤ、センティネラ鉱山の操業を部分停

止した。BHP Billiton はエスコンディーダ鉱山を閉鎖した。アントファガスタ/バリックワールドのサルジバル鉱山も採掘を部分停止した。ミネラルミナカパーチリはカセロネス銅鉱山の採掘と鉱石の運搬を停止した。内務省国家緊急対策室(ONEMI)は 7 日、警報レベル黄色から赤に引き上げ、多くの道路が閉鎖された。

ペルー全国鉱業冶金鉄鋼労連(FNTMMS)は 6 月 15 日、ペルー政府の労働政策に抗議して傘下の労組に対し 7 月 19 日に予定する鉱業ゼネストへの参加を呼びかけた。政府は労働者の解雇条件の緩和、低賃金若年労働者の雇用促進、労働者の利益配分比率の引き下げなどを認める政令を公布した。FNTMMS には 40 千名以上の労働者が加盟する。

一方、BHP Billiton は 6 月 1 日、エスコンディーダ銅鉱山(チリ)の不可抗力条項を解除したと発表した。同鉱山では労組が 2 月 9 日にストライキを開始し、同社は翌 10 日に不可抗力条項を発動した。ストは 3 月 24 日に収拾したが、正常操業の回復に約 2 か月を要した。同社は長期ストを受けて、2017 年度(2017 年 6 月期)の銅生産計画を 1.07 百万tから 780~800 千tに下方修正した。労組は旧労働協約を 18 か月延長することを条件にストを解除した。

需給動向については、国際銅研究会によれば、2017 年 1~3 月の世界の銅鉱石生産は前年同期比 3.5%減 4,635 千t、地金生産は横ばいの 5,768 千t、消費は 2.8%減の 5,604 千t、この結果、地金需給バランスは前年同期の▲12 千tから+164 千tへと供給過剰に転じた。報告在庫は横ばいの 1,561 千t、在庫/消費比率は 3.3 週間横ばいとなった。

鉱石生産の内訳は精鉱が 3%減少、SXEW は 6%減少した。国別にはチリがエスコンディーダ鉱山のストライキとコデルコの鉱石品位低下の影響で 14%減少した。カナダとモンゴルは低品位鉱体へのシフトの影響でそれぞれ 18%、23%減少した。インドネシアは 1~4 月の精鉱輸出禁止により 10%減少した。メキシコ、ペルーは鉱山の新設、増強によりそれぞれ 17%、9%増加した。地域別にはヨーロッパが 5%、オセアニアが 9%増加、アメリカは 7%、アフリカは 5%減少、アジアは横ばいであった。鉱山稼働率は 84.2%から 77.9%に低下した。

地金生産の内訳は一次生産が 2%減少、二次生産は 13%増加した。二次生産はとくに中国のスクラップ供給の増加を背景に増加した。国別には中国が 7%増加、メキシコは SXEW 生産能力の増強により 12%増加した。しかしながら、チリは電解、EW 生産ともに減少し 18%減少した。日本、米国も減少した。地域別にはアジアが 5%、アフリカは 2%、ヨーロッパは 2%増加したが、アメリカは 12%、オセアニアは 5%減少した。精製工場の稼働率は 86.4%から 84.5%に低下した。

消費は中国を除く世界合計が 1%増加し、中国の見掛け消費の減少を相殺した。中国の見掛け消費(未報告在庫の増減を除外)は 6.5%減少した。国内生産が 7%増加したが、ネット輸入が 35%減少したことによる。その他の主要国ではインド、日

本、台湾が増加したが、米国、ドイツは減少した。地域別にはアフリカが 1%、アジアは 3%減少(中国を除くアジアは 7%増加)、アメリカは 1%、ヨーロッパは 55%増加した。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

5/29	670	6/6	660	6/9	670	6/15	660	6/20	680	6/27	690
7/3	710	7/6	700								

2. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2017年5月分=平成29年5月分)

生産	: 128,808t	(前月比 9.2%増、前年比 1.9%減)
出荷	: 119,972t	(前月比 2.2%減、前年比 18.4%増)
在庫	: 104,366t	(前月比 12.2%増、前年比 4.5%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

平成29年(2017年)5月の銅地金生産は前月比9.2%増、前年同月比1.9%減の128.8千tと直島製錬所の定修明けで前月比が再び増加したが、前年比は2か月連続の減少となった。出荷は前月比9.1%減、前年比1.8%減の120.0千tでそれぞれ2か月連続と3か月ぶりの減少。内訳は内販が前月比は連休の影響で12.2%減、前年比は6.3%増の76.4千tと前年比は10か月連続の増加。輸出は前月比3.0%減、前年比13.3%減の43.5千tで前月比は2か月連続、前年比は2か月ぶりの減少。内販のうち電線向けは前年比6.6%増の47.3千tで再び増加、伸銅品向けは8.2%増の25.9千tと12か月連続の増加。在庫は前月比12.2%増、前年比4.5%減の104.4千tとそれぞれ4か月ぶりの増加と2か月連続の減少となった。

3. 需要部門別動向

日本電線工業会によれば、平成29年(2017年)5月の銅電線出荷は前月比が連休の影響で10.3%減、前年同月比は3.0%増の50.7千t(推定)と3か月連続の増加となった。うち内需は前年同月比3.2%増の49.5千tで3か月連続の増加、輸出は5.4%減の1.2千tで3か月ぶりの減少。内需の部門別には、自動車が13か月連続、その他内需は7か月の連続の増加、建設電販は6か月ぶり、通信は2か月ぶりに増加に転じた。一方、電力は9か月連続、電気機械は7か月ぶりの減少となった。

日本伸銅協会によれば、平成29年(2017年)5月の伸銅品生産は前月比が連休の影響で5.9%減、前年同月比は6.5%増の66.4千t(速報)と前年同月比は10か月連続の増加となった。うち内需向けは前年同月比6.9%増の55.1千tで10か月連続、輸出は4.5%増の11.2千tで7か月連続の増加。品種別には、半導体、コネクタ、自動車端子向けの銅条が13か月連続、コネクタ向けの青銅板条は9か月連続、自動

車端子向けの黄銅条は5か月連続、エアコン向けの銅管は3か月連続の前年同月比で増加となった。

鉛

【海外】

2017年6月のLME鉛相場は月初から月中にかけて\$2,000/t台で推移していたが、その後強気に転じ月末には\$2,300近くまで上昇した。

米国経済をめぐっては、5月の失業率が4.3%と2001年5月以来の低水準となり、経済も持続的に成長しているとして、米連邦準備制度理事会(FRB)は14日、0.25ポイントの利上げを決定した。一方、第1四半期GDP確報値は前期比1.4%/年増と改定値から上方修正されたが、伸び率は2016年第2四半期以来の低水準にとどまった。

中国経済は5月の財新製造業景気指数(PMI)が11か月ぶりに50を下回り、1~5月の固定資産投資の前年比伸び率が2000年以来の二桁台割れとなった。しかし、5月の住宅価格は上昇し需要が引き続き旺盛なことが示され、6月の財新PMIは3か月ぶりの水準に反発した。

月末にかけては原油相場の回復、ドル安が鉛相場を押し上げた。

NYMEX原油先物は石油輸出国機構(OPEC)主導の減産に懐疑的な見方が広まるなか、20日には\$42.75/bblと2016年11月14日以来の安値を付けたが、その後は米国のガソリン在庫減少やシェールオイル掘削の稼働数の減少がはやされ、30日にかけて\$46.08へと7日連続で上昇し、年初来最長の連続高となった。

ドルはドラギ欧州中央銀行(ECB)総裁が量的緩和縮小の可能性を示唆し、利上げを進めるFRBにその他の中央銀行が追随しはじめているとの見方から、対ユーロで前年5月以来となる\$1.14台まで軟化した。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2017年1~4月の世界の鉛鉱石生産は前年同期比13.0%増の1,709千t、地金生産は8.4%増の3,909千t、消費は11.2%増の3,977千t、地金需給バランスは前年同期の+28千tから▲68千tへと若干の供給不足となった。

鉱石生産はアジアが29.3%、ヨーロッパは5.1%増加、アメリカは1.4%、オセアニアは26.7%、アフリカは6.5%減少した。国別には中国の増加がオーストラリアの減少を相殺した。地金生産はアジアが12.3%、アメリカは5.9%、アフリカは3.0%増加、ヨーロッパは横ばい、オセアニアは13.7%減少した。国別には中国、インド、米国が増加した。消費はアジアが13.4%、アメリカは13.8%、ヨーロッパは1.5%増加、アフリカは横ばい、オセアニアは16.7%減少した。国別には米国が輸入の急増で増加、中

国も増加した。4 月末の地金の報告在庫は前年同月比 5.9%増の 509 千t、在庫/消費比率は 2.3 週間で横ばいであった。

中国は鉱石生産が 27.5%増の 919 千t、鉛精鉱輸入は 3.0%減の 224 千t、地金生産は 15.9%増の 1,681 千t、地金の輸出入は 10 千tのネット輸出から 34 千tのネット輸入に転じた。この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫)は 16.4%増の 1,671 千tとなった。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

5/18 295 5/25 290 6/22 297 7/3 314

6 月は LME 鉛相場が月初の\$2,000/t 水準から月末の\$2,300 弱まで上昇したことから、鉛建値も下旬に入り上昇した。

2. 鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2017 年 5 月分=平成 29 年 5 月分)

生産 : 17,264t (前月比 1.4%増、前年比 0.6%減)

出荷 : 16,411t (前月比 2.2%減、前年比 18.4%増)

在庫 : 9,908t (前月比 9.3%増、前年比 60.8%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

5 月の生産は前月比増だが、前年同月比は原料不足から 7 か月連続の減。出荷は大型連休の影響で前月比減だが、前年同月比は堅調な蓄電池向け需要から 5 か月連続の増となった。補修用の蓄電池需要の増加が鉛の販売に大きく寄与している。在庫は生産増から 2 か月連続で微増したが、前年同月比は 20 か月連続の減。

3. 需要部門動向

5 月の自動車生産台数は前年同月比 5.5%増の 693,013 台となり、7 か月連続で前年同月を上回った。軽自動車の生産台数が大幅増となった。乗用車は前年同月比 7 か月連続でプラスだが、トラックは同 2 か月ぶりのマイナス、バスも同 2 か月ぶりのマイナス。

5 月の自動車輸出台数は前年同月比 5.8%増の 320,255 台となり、4 か月連続で前年同月を上回った。

5 月の二輪車生産台数は前年同月比 67.5%増の 51,112 台と 8 か月連続で前年同月を上回った。

(一社)電池工業会の調査によると、4 月の自動車用鉛蓄電池のメーカー販売個数は、新車用、補修用、輸出用を併せた総合計で 1,780 千個(前年同月比 8%増)と 6 か月連続で増加、自動車用以外の鉛蓄電池も 594 千個(同 3%増)とこちらも 3 か月連続で上昇した。その結果、鉛蓄電池の出荷はトータルで 2,374 千個(同 7%増)

と7か月連続で増加した。今年に入り堅調に推移している。

鉛関連製品生産統計

		4月	5月(速報値)
自動車	数量(台)	749,224	693,013
	前年同月比(%)	116.3	105.5
		3月	4月
自動車用鉛蓄電池	数量(鉛量t)	17,866	15,758
	前年同月比(%)	110.1	108.5

(出所: (一社)日本自動車工業会, 経済産業省生産動態統計調査)

亜鉛

【海外】

2017年6月のLME亜鉛相場は月初から月中にかけて\$2,500/t前後で推移していたが、その後強気に転じ月末には4月以来となる\$2,700台へと上昇した。

米国経済をめぐっては、5月の失業率が4.3%と2001年5月以来の低水準となり、経済も持続的に成長しているとして、米連邦準備制度理事会(FRB)は14日、0.25ポイントの利上げを決定した。一方、第1四半期GDP確報値は前期比1.4%/年増と改定値から上方修正されたが、伸び率は2016年第2四半期以来の低水準にとどまった。

中国経済は5月の財新製造業景気指数(PMI)が11か月ぶりに50を下回り、1～5月の固定資産投資の前年比伸び率が2000年以来の二桁台割れとなった。しかし、5月の住宅価格は上昇し需要が引き続き旺盛なことが示され、6月の財新PMIは3か月ぶりの水準に反発した。

月末にかけては原油相場の回復、ドル安が亜鉛相場を押し上げた。

NYMEX原油先物は石油輸出国機構(OPEC)主導の減産に懐疑的な見方が広まるなか、20日には\$42.75/bblと2016年11月14日以来の安値を付けたが、その後は米国のガソリン在庫減少やシェールオイル掘削の稼働数の減少がはやされ、30日にかけて\$46.08へと7日連続で上昇し、年初来最長の連続高となった。

ドルはドラギ欧州中央銀行(ECB)総裁が量的緩和縮小の可能性を示唆し、利上げを進めるFRBにその他の中央銀行が追随しはじめているとの見方から、対ユーロで前年5月以来となる\$1.14台まで軟化した。

亜鉛独自の市況要因としては、LME倉庫のオンワラント亜鉛在庫が減少を続けている。現物需要の改善が主因とみられ、在庫は倉庫間移動ではなく中国市場に出荷

されている。中国市場はスメルターの協調減産や需要期入りを背景に SHFE 在庫が過去最低水準に減少し、プレミアムが上昇した。しかし、SHFE 相場が大幅なバックワーデーションになったことをきっかけに、月末にかけて LME/SHFE のアービトラージが縮まったことから、現物市場の供給逼迫が緩和に向かっていることを示している。

供給障害要因としては、テックリソーシズ労使が 6 月 9 日、トレイル鉛亜鉛製錬所(加)の労働協約更改交渉を仲裁調停に持ち込むことを確認した。現行協定は有効期間 5 年で今年 5 月 31 日に失効した。

アメリカンジンクリサイクリング(旧ホースヘッドホールディングス)のムアズボロ亜鉛製錬所(米)は 2017 年中に再開されない見通し。同社は 2016 年 2 月 2 日に米連邦破産法第 11 章が適用されたが、9 月に解除されていた。また、ムアズボロ製錬所は建設費 500 百万ドルで設立されたが、操業トラブルが相次ぎ 1 月 22 日に閉鎖されていた。生産能力 155 千 t/年のフル生産に到達するためには 117 百万ドルの追加投資が必要とされる。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2017 年 1~4 月の世界の亜鉛鉱石生産は前年同期比 7.3%増の 4,269 千t、地金生産は 1.6%増の 4,494 千t、消費は 3.7%増の 4,606 千t、地金需給バランスは前年同期の▲20 千tから▲112 千tへと供給不足幅が拡大した。

鉱石生産はアジアが 13.2%、アメリカは 1.4%、ヨーロッパは 3.0%、アフリカは 26.2%増加、オセアニアは 9.1%減少した。国別には中国、エリトリア、インド、ペルー、トルコなどが増加した。地金生産はアジアが 2.4%、ヨーロッパは 3.4%、アフリカは 2.9%増加、アメリカは 3.7%、オセアニアは 2.6%減少した。国別にはフランス、中国、インド、カザフスタンが増加したが、カナダ、ペルー、韓国の減少に相殺された。消費はアメリカが 28.0%、オセアニアは 20.9%、アフリカは 23.1%増加したが、アジアは横ばい、ヨーロッパは 1.4%減少した。国別には米国が輸入の急増により見掛け消費が増加した。4 月末の地金の報告在庫は前年同月比 14.0%減の 1,260 千t、在庫/消費比率は 5.6 週間から 4.5 週間に低下した。

中国は鉱石生産が 3.6%増の 1,594 千t、亜鉛精鉱輸入は 17.7%増の 385 千t、地金生産は 1,958 千tで横ばい、地金のネット輸入は 53.5%減の 99 千t、この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫/国家備蓄)は 2,095 千tで横ばいとなった。

【国内】

1. 建値推移(千円/t)

5/16	340	5/19	331	5/25	346	6/1	337	6/6	322	6/12	325
6/21	328	6/26	352	7/3	361						

6月にはLME亜鉛相場が月初の\$2,500/t水準から月末の\$2,700台後半へ続伸したことで、亜鉛建値も上昇基調を辿った。

2. 亜鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2017年5月分=平成29年5月分)

生産 : 47,137t (前月比 24.3%増、前年比 0.1%減)

出荷 : 40,728t (前月比 7.9%減、前年比 3.5%増)

在庫 : 70,004t (前月比 10.1%増、前年比 19.1%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

5月の生産は八戸製錬所の大規模定修明けにより前月比大幅増となったが、前年同月比は原料不足から4か月連続の減。出荷は大型連休の影響で前月比大幅減だが、前年同月比は3か月連続の増。前年同月比がプラスを保っているのは、めっき関連が前年実績を上回る販売実績となったためである。在庫は出荷減から前月比増だが、前年同月比は4か月連続の減。

3. 需要部門動向

5月の鉱工業生産指数は前月比3.3%減、前年同月比6.8%増の100.4(季節調整済、2010年=100基準、速報値、以下同じ)となった。前月比は2か月ぶりの低下だが、前年同月比は7か月連続のプラスとなった。自動車メーカーを中心に、前月に大幅な増産となった反動もあって生産が抑制された。大型連休で工場の操業を停止した企業があった影響も出た。経産省は生産の基調判断を「持ち直しの動き」に据え置いた。

5月の生産指数は15業種のうち14業種が前月から低下し、1業種が上昇した。輸送機械工業が前月比11.7%低下したほか、はん用・生産用・業務用機械工業が同2.6%、金属製品工業が同6.3%それぞれ低下した。

出荷指数は前月比2.8%減の98.3と2か月ぶりにマイナスに転じたが、前年同月比は5.5%増と7か月連続のプラスとなった。

在庫指数は前月比0.1%増の111.4と6か月連続で上昇したが、在庫率指数は前月比1.9%減の112.5と3か月ぶりに低下した。

大企業の生産見通しを示す製造工業生産予測指数では、6月が前月比2.8%の上昇、7月は同0.1%の低下を見込んでいる。

4月の亜鉛めっき鋼板生産(次工程用消費を除く)は6か月連続で前年同月比プラスとなった。しかし、数量は31か月連続で100万t台割れ。

4月の伸銅品生産量は70,552t(確報値、対前年同月比6.6%増、対前月比4.5%減)で、2016年(平成28年)8月から9か月連続の対前年同月比プラスだった。7万t超えは2か月連続となり、4月としては2011年(平成23年)(73,918t)以来の高水準となった。また、銅条・管・棒、黄銅条・棒、青銅板条、洋白その他板条・棒線が対

前年同月比プラスとなった。銅条は12か月連続の対前年同月比プラス、銅管は2か月連続の対前年同月比プラス、銅棒も3か月振りにプラスに転じた。内需向けは57,589tで9か月連続の対前年同月比プラス、輸出向けは12,963tで6か月連続の対前年同月比プラス。

黄銅製品では、黄銅条が8,759tで対前年同月比3.8%増と4か月連続のプラス、黄銅棒は16,538tで対前年同月比6.9%増と12か月連続のプラスとなった。

亜鉛関連製品生産統計

		3月	4月
亜鉛めっき鋼板	数量(t)	974,908	877,908
	前年同月比(%)	108.1	111.8
黄銅製品	数量(t)	30,264	29,081
	前年同月比(%)	101.1	103.7
亜鉛ダイカスト	数量(t)	1,980	1,759
	前年同月比(%)	118.6	114.7
亜鉛華	数量(t)	6,446	4,876
	前年同月比(%)	120.0	126.9

(出所:経済産業省生産動態統計調査)